

テーマ2. 「不登校の子どもたちの置かれている環境から考える

あつたら良いと思う環境」

《不登校に対する印象・認識》

- ・ 私の親しい友人や自分自身に不登校という経験がなかったので、皆さんの意見を聞いて衝撃というか、整理ができていない部分がある。(A)
- ・ 「わからない」ということもとても大事だと思う。その時は何にも思わなかったけど、今改めて考えているということがいいことだと思う。(A)
- ・ 一昔前は、不登校の原因を掘り起こして、その原因を取り除こうという姿勢であったが、最近では、原因は本人にもわからないし、一つではないという考えのもと、こどもに何かしてあげるのではなく、こどもが持つる力を育て、伸ばしていく支援のあり方に変わってきている。(A)
- ・ 不登校を悪と捉えるのは、大人だけなのでないか。学校に数人は不登校がいて、それが当たり前だったので、悪いこととは思わない。(A)
- ・ 私も悪とは思わないが、SNSで「私は毎朝学校へ行って、やりたくない勉強をしてるのに、不登校の子は好きな時間に起きて、好きな時間に食べて、ゲームもできていいよね」という投稿を見たことがある。同級生の中にはこのような考えの人もいるとは思う。不登校に子がこのような内容を見ると傷つくだろうなと思った。不登校とインターネットについても繋げて考えないといけないと感じた。(A)
- ・ こどもたちが悪と捉える理由として、不登校の子が久しぶりに学校に来た際に、周囲は配慮をしていたが、その子にとっては居づらい環境であり、その点を周囲が注意された際に、「普段来ない方が悪いのに」といったようなすれ違いが生まれると思う。その時の先生や周り対応によって、悪にもなるし、改善されることもあると思う。(A)

《学校以外の居場所》

- ・ こども一人一人の特性に併せた「学校」以外の居場所があってもよいのでは。(A)
- ・ 不登校のこどもたちには、家だけではなく、習い事や祖父母の家など、社会とつながれる場所が一つでも多い方がよいと思う。居れる場所が多いほど、いろんな面が見えてくるから。(A)
- ・ こどもに関する事業を立ち上げるに当たって、ノウハウを持っている人たちが周りにいることで事業が派生していくと思うが、高知県のようにあまりない状況ではそれも難しいのではないかと感じた。(A)
- ・ 大人は、生きづらい環境から抜け出せる手段が多いが、こどもは少ないと思う。例えば、職場でいじめられたとき、大人は転職をしたり、休業したりと、お金を稼いでいるということもあるが、選択肢が多い。こどもの場合は、学校に行けなくなると、相談できる場所やその他の居場所がなければ家にいることしかできない。(B)
- ・ こどもたちが利用できる施設などをガイドマップのようなかたちで、知識の付いた学生たちが、地域の小さな後輩たちのために作ってあげるというのも良いのでは。学生のみみんながイメージできないことは、幼いこどもたちはさらにイメージできないと思う。(B)
- ・ SNSやインターネットも逃げ道の一つであると思う。インターネットは怖いと言われているが、正しく使えば便利なものであり、どこの環境からでもアクセスできる。中には、心のうちを文字打つことによって、溜め込んでいたものを吐き出せる人もいると思う。(B)

《幼い頃の周囲の関わり》

- ・ 幼児期の発達は、周囲の人の影響を受けるので、一人一人にあった環境を周囲の人が考えることは大切。(A)
- ・ 不登校は急に発生するわけではなく、発達障害の場合は、幼い頃からサインがたくさん出ているが、周囲の人が受け取ってあげれていないことも要因。個性として認めることは大切だが、アプローチの方法が余りにも少な

過ぎることで、その後のこどもへの影響が大きいと考える。(A)

- 1歳6か月児、3歳児の法定健診などで、行政が入るチャンスがたくさんあると思う。保護者が心開いて、行政も入っていけるような環境づくりが必要であると思う。(A)
- 正直、中学校で不登校になると、即効性がある方法はない。地道に少しずつ突破できる場所を探していくことしかない。幼い頃から自分の意思決定ができる場を安心して提供してもらえたり、困難に差し掛かった時にそれを乗り越える力や、誰かと協力して解決する力を身につけられるような経験が必要であると思う。最近、余りにもそういう場の提供が少ないと思う。(A)
- 思考力については、例えば公園に行って、雲梯があったとき、大人が遊び方を教えることもできるが、こども自身に遊び方を模索させてあげたり、アリを見つけた時に、どんな速度なのか、何匹いるかなどをじっくりと見させてあげることで、何かに没頭する力が付いてくる。(A)

《多様な教育の機会》

- 通信制の高校への進学希望者が全国的に増えており、朝学校へ行って夕方に帰るといふ学生生活をしてる人が、少し減ってきてるといふ印象。不登校を解決することも大事だが、学校の通い方が多様化しているという視点も必要。(A)
- 大阪には、フリースクールが地域にたくさんある。都会には割とあるほうではないかという印象であるが、高知県はどうだろうか。高知県は学校同士の距離が離れているが、フリースクールについても少数しかない場合、そもそも学校に通いづらい子どもたちが、通えるのか。結局、引きこもってしまうのではないか。(A)
- 高知県にフリースクールは少ないと思う。自転車で通えない子どもたちは、親が仕事を休んで、送り迎えをしている。また、行っても1~2時間程度のところが多い。(A)
- 開所日も毎日ではなく、週に数回程度が多い。(A)

- ・今ある仕事のほとんどが、AIに仕事取られて、何十年後に何%かの仕事がないなど、社会が変わってきている。ただ、学校教育は順応していないように感じている。「とりあえず普通高校に行く」というような、「中学校を卒業したら高校行くもの、高校を卒業したら大学か専門学校に行くもの」という人生のルールを皆がイメージしてる。特に高知は多いのではないか。多分、都会だったら、若いうちから起業をする子も多いと思うし、今後はそれがスタンダードになっていくのではないか。ただ、学校教育では、そういう力を身につけられていない現状である。義務教育でも自分の力で生きていける力を身に着けることは必要であると思う。(A)
- ・通信制の小学校や中学校があってもいいのではないか。(B)
- ・夜間中学校という様々な年齢の人が学び直しをすることができる学校がある。徳島県では、大学を卒業した人も受け入れている学校がある。中学生の頃に学校に通えず、学校の雰囲気味わいたいという方がいるからだろう。(B)
- ・義務教育だから学校に通うではなく、子どもたち自ら手段を選ぶことが当たり前になればと思う。(B)
- ・中学校は義務教育であるため、皆が卒業できるが、義務教育の学び直しができるのはとても良いと思った。(B)

《先生との関わり》

- ・中学校の頃に校長先生から給食の先生までを一覧にしたものが渡され、「好きな先生」「話したい先生」をアンケートで答えることがあった。(B)
- ・私の学校では、第3希望まで「話したい先生」を答えて、学期ごとに選んだ先生と話ができる機会があった。相談したいことがあるときだけでなく、相談したいことがない場合は、雑談や趣味の話をしてくれた。(B)

《支援を利用しやすくするために》

- ・不登校の子どもたちの置かれてる環境から考えるあつたら良いと思う環境というのは、少し学校行ける子たちの考える環境と、行きたくない、行か

ないと示しているこどもたちの考える環境は違うと思う。(B)

- SCやSSWと関わる機会が少ないのではないか。中・高校生の頃、学校に通って5年目でSSWの方を初めて知った。女子校であったのに男性のSSWであったことにも疑問を感じたし、SSWに相談するには、保健室の先生を介して予約し、学校の授業を休んでではないと会うことができず、相談する人はいないだろうと思った。(B)
- 中学生の頃は、SCやSSWが休み時間に教室に来ることがあり、見かけたことがあるが、高校では、いるのかいないのかも分からない。私立と公立でも違うのか。(B)
- 私の学校では、学期が終わるタイミングで、SCやSSWと全員が15分程度面談を行っている。(B)
- 私自身が教室に入れなかった経験がある。その際、SSWと火曜日会うことを楽しみに頑張っていた。(B)
- 小学校から中学校に上がった際に、SSWが変わらなかったのは良かったと思う。「中学校の制服似合っているね」などの話をしてくれた。(B)
- 高校に入学して3ヶ月くらいで学校をやめた子がいた。今思うと相談できる機関や人について伝えられていなかったのではないかと思う。(B)
- 相談することによって改善するというイメージがないと、知っていても利用しないと思う。気軽に相談してみて駄目だったら他の選択肢を選べるように、敷居を下げて、選択肢の一つとして認識してもらいたい。(B)
- SCやSSWは、担任の先生とは違い、知らない人という認識だと思う。どんな人だろうというところから探らなければならず、信頼関係がない人に自分の心を開いていいのか悩む。(B)
- SCやSSWが休み時間に訪問してくれたという経験は、非常に良かったと思う。そこで顔を知り、定期的に来てくれる存在として認識する。これが相談するための敷居を大きく下げることにつながると思う。(B)
- 学校にSCやSSWがいたことを知らないが、売店の方と話をたくさんしていた。SCやSSWにこだわらず、様々な大人と交流する機会があればいいと思う。(B)